

# 図書館通信

# — 36 —

1976. 4



## 新入生のための特集

### 大学生活と附属図書館

館長 中 沢 正 寿

季節は春、人生は青春、そして新しい大学生活へのスタート、新入生諸君の心境はいま格別でしょう。これから始まる大学生活の中へ、附属図書館との深く強いかかわりを取り入れるよう奨めることによって、その入学を心から祝い、かつ歓迎します。

大学生活をその内容からみますと、学問、文化（芸術、技術等）の研究と学習を中心として展開していきます。そしてまた、大学生活への個人の構えや態度からみますと、本人自身の主体的、自発的、能動的、自律的態度と意欲とがその成立に欠くことのできない基礎的前提となっています。

ところで、大学附属図書館はこのような全大学人の生活の本質的側面をふくらまし、精密にし、客観的にし、発展させる上で役立つように設立されています。つまり、図書を中心とするいわゆる「図書館資料」を集め、整理し、保管し、かつ利用、活用の便をはかることを役割とし、使命として設置され、運営されてきています。そして、収集も、整理も、保管もこれが利用、活用されてこそはじめて生きてくるし、むしろそのためにこそあるといえましょう。学生諸君との関係では、アメリカの大学附属図書館では、“Study with books, Teaching with books.”ということがいわれ、こうありたいと思います。しかし、これを徹底させるためには、具体的には開館延長など、「学習室」としての図書館の利用、活用が必要であり、いまの日本においてはいろいろと困難な事情があります。この面の運営にも努力を続けていきますが、とりあえず「図書館資料の利用、活用」を主体的、自主的、自発的、能動的にはかるようにすすめます。

そのためには、附属図書館にまず親しみ、足しげく出入りしてください。附属図書館は全学のもので、ということは同時に自分のものです。「われわれの図書館、自分の図書館」という所属感情、一体感を土台として、深く強いかかわりを育て、その大学生活を充実、発展させるよう、期待を強くよせていきたいと思っています。

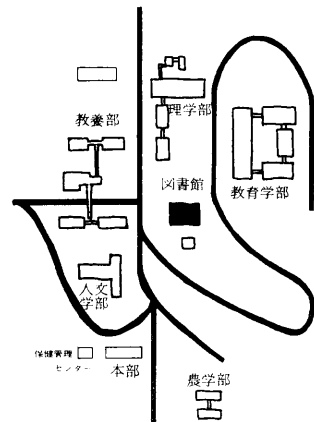
### 館内案内

を下記の通り行いますので、御参集ください。

- 期 間 4月16日(金)～23日(金)
- 時 間 第1回 11:00～  
第2回 13:30～  
第3回 15:20～  
(但し、土曜日は第1回のみ)
- 所要時間 毎回40～60分
- 内 容 図書館案内(書庫内見学も含む)利用案内 他

### も く じ

大学生活と附属図書館	
中 沢 正 寿	1
図書館のすすめ	
上 田 伝 明	5
カードを繰る楽しみ	
角 替 弘 志	5
危機の時代と学問の出発	
山 本 義 彦	5
古典の力	
橋 爪 裕 司	6
思い出の書	
山 田 泰	6
多読・新入生・図書館	
野 村 秀 樹	8
私と図書館	
松 島 博 文	8
図書館案内	1 - 4
静岡市内の図書館と博物館	7



# 三階鳥かん図

## ①受付

- a. 入館・退館の手続
- b. 館外貸出証申込受付・発行
- c. その他インフォメーション

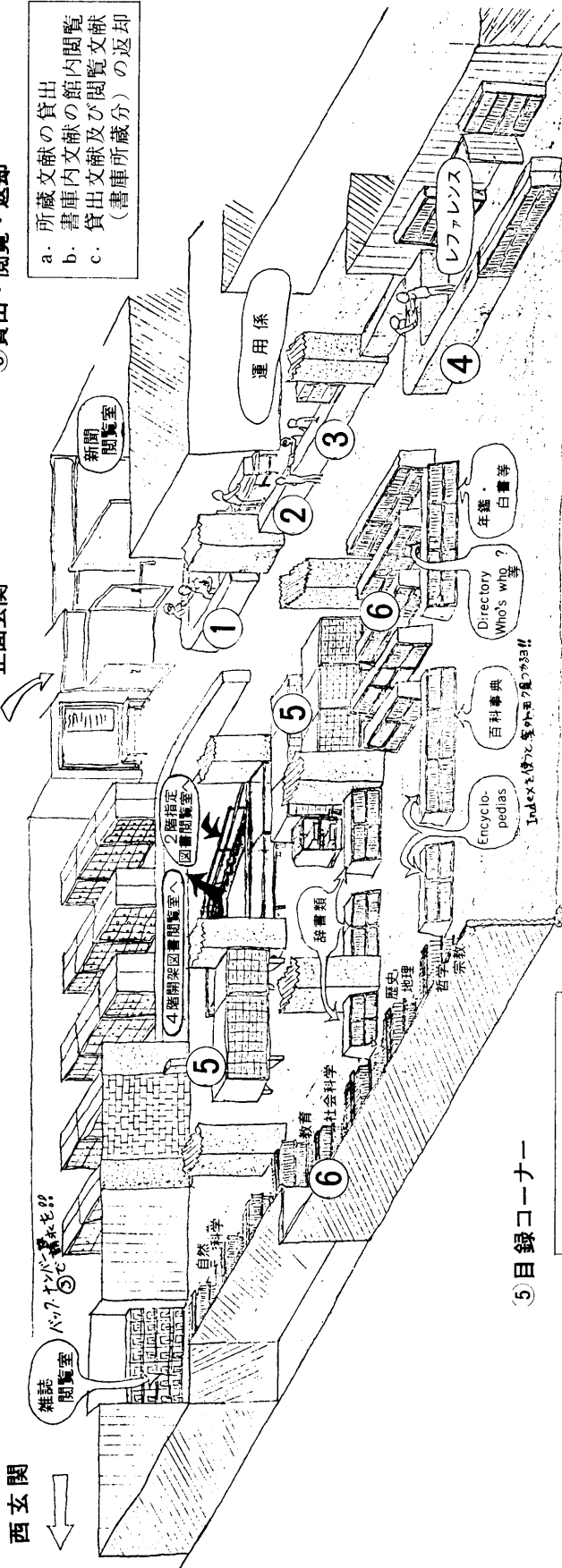
## ②複写・学外資料の利用申込

- a. 文献の複写
- b. 学外諸機関への紹介状発行
- c. 学外文献の貸出申込

## ③貸出・閲覧・返却

- a. 所蔵文献の貸出
- b. 書庫内文献の館内閲覧
- c. 貸出文献及び閲覧文献(書庫所蔵分)の返却

## 正面玄関



## ⑤目録コーナー

- a. 著者名目録・書名目録(ABC順排列)
- b. 分類目録
- c. 特定図書の有無・図書の排架位置 etc. の確認

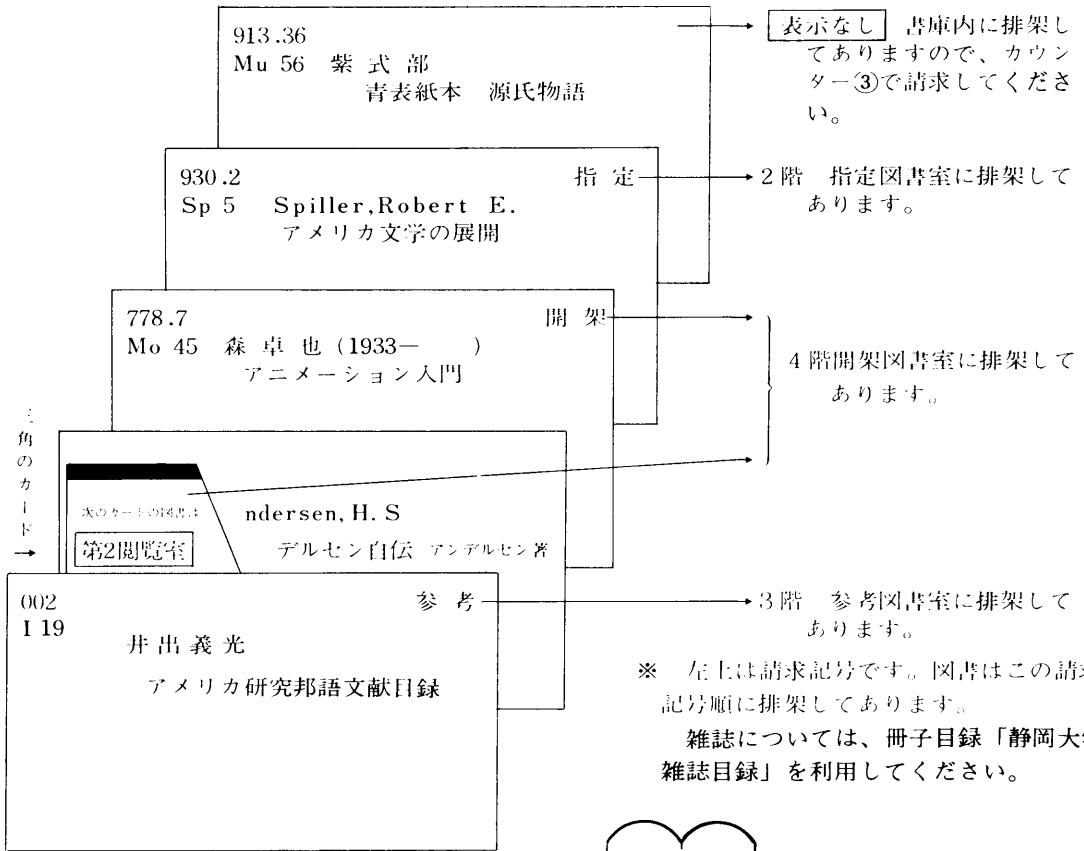
## ⑥参考図書コーナー

- a. 辞書・百科事典・年鑑・白書 etc. の各種参考資料
- b. 館内閲覧のみ閲覧後は返却台へ

## ④レファレンス

- a. 図書館利用案内
- b. 目録利用案内
- c. 書誌事項の確認
- d. 文献の所在確認
- e. 他館の利用案内
- f. その他の調査

目録における図書排架位置の表示



蔵書の種類

**開架図書**……4階閲覧室に24,132冊の図書があります。ここには一般的によく利用される学生の学習及び教養のための図書が備付けてあります。

**指定図書**……2階閲覧室に16,357冊の指定図書があります。指定図書とは、教官が講義の内容に関連ある資料を指定し、学生はこれを読んで学んでゆく、いわゆるリザーブ・ブックの制度による図書が備付けてあります。

**参考図書**……3階参考室によく使用される参考図書(辞典・事典・書誌・目録等)が5,073冊備付けてあります。

**書庫内の図書**……古い図書および特に必要とみなされた図書は書庫にあります。これらは、全て目録にあり閲覧できます。

書庫内にある主な図書。

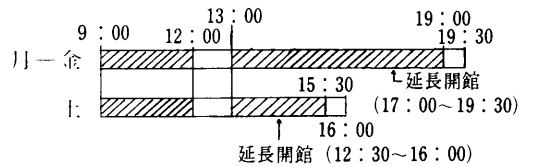
- 岩波文庫
- 岩波新書
- 旧制静岡高等学校蔵書等



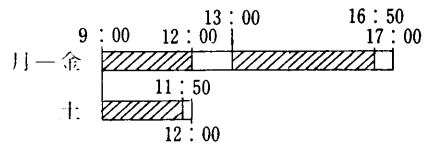
サービス時間

窓口受付時間

a. 試験期(9月、1月、2月)



b. 試験期以外



- (注) ①番受付、②番複写・学外資料利用申込、③番貸出・閲覧・返却、④番レファレンスの業務を行っている時間帯。  
 ①番受付、③番返却の業務のみ行っている時間帯。

c. 休館日

日曜日・祭日・本学創立記念日(6月1日)  
その他図書館業務上必要な時(「図書館通信」・掲示等でお知らせします)

## 図書館備付雑誌一覧

- ドキュメンテーション研究（日本ドキュメンテーション協会）  
 日本古書通信（日本古書通信社）  
 書誌学（日本書誌学会）  
 雑誌記事索引 科学技術編（国立国会図書館）  
 “ 人文科学編（ “ ）  
 “ 経営管理編（ “ ）  
 文献ジャーナル（富士短期大学出版部）  
 情報管理（日本科学技術情報センター）  
 情報科学（情報科学研究所）  
 朝日ジャーナル（朝日新聞社）  
 朝日アジアレビュー（朝日新聞社）  
 文芸春秋（文芸春秋社）  
 文化評論（日本共産党機関紙経営局）  
 現代の眼（現代評論社）  
 科学と思想（新日本出版社）  
 リーダースダイジェスト（日本リーダースダイジェスト社）  
 世界（岩波書店）  
 市民（勁草書房）  
 新聞月報（新聞月報社）  
 総合ジャーナリズム研究（東京社）  
 諸君（文芸春秋社）  
 太陽（平凡社）  
 展望（筑摩書房）  
 Time（タイム・ライフ社）  
 中央公論（中央公論社）  
 前衛（日本共産党機関紙経営局）  
 人民中国（東方書店）  
 伝統と現代（伝統と現代社）  
 News Week International ed.（ニューズウィーク社）  
 理想（理想社）  
 思想（岩波書店）  
 思想の科学（思想の科学社）  
 歴史学研究（青木書店）  
 歴史評論（校倉書房）  
 朝鮮研究（日本朝鮮研究所）  
 歴史と人物（中央公論社）  
 判例時報（日本評論社）  
 法学セミナー（日本評論社）  
 法律のひろば（帝国地方行政学会）  
 法律時報（日本評論社）  
 ジュリスト（有斐閣）  
 季刊現代法（成文堂）  
 現代法ジャーナル（勁草書房）  
 アジア経済（アジア経済出版会）  
 ダイヤモンド（ダイヤモンド社）  
 週刊エコノミスト（毎日新聞社）  
 月刊エコノミスト（毎日新聞社）  
 季刊現代経済（日本経済新聞社）  
 経済（新日本出版社）  
 経済評論（日本評論社）  
 経済セミナー（日本評論社）  
 近代経営（ダイヤモンド社）  
 季刊理論経済学（理論・計量経済学会）  
 経済資料研究（経済資料協議会）  
 部落（部落問題研究所）  
 部落解放（大阪部落解放研究所）  
 現代と思想（青木書店）  
 行動科学研究（東海大学出版会）  
 公害研究（岩波書店）  
 公害対策（公害対策技術同友会）  
 労働・農民運動（新日本出版社）  
 世界の労働（日本ILO協会）  
 就職ジャーナル（日本リクルートセンター）  
 唯物史観（河出書房）  
 月刊世論調査（大蔵省印刷局）  
 受験新報（法学書院）  
 望星（東海大学出版会）  
 大学資料（文部省大学学術局）  
 学校体育（日本体育社）  
 学術月報（日本学術振興会）  
 教育（国土社）  
 教育心理（日本文化科学社）  
 教育と情報（第一法規出版）  
 I D E（民主教育協会）  
 児童心理（金子書房）  
 文部時報（帝国地方行政学会）  
 科学（岩波書店）  
 科学朝日（朝日新聞社）  
 科学の実験（共立出版）  
 科学史研究（岩波書店）  
 自然（中央公論社）  
 サイエンス（日本経済新聞社）  
 日本の科学と技術（日本科学技術情報振興財団）  
 数理科学（ダイヤモンド社）  
 現代数学（現代数学社）  
 数学（岩波書店）  
 数学セミナー（日本評論社）  
 化学（化学同人）  
 化学の領域（南江堂）  
 現代化学（東京化学同人）  
 海洋科学（海洋出版）  
 化学と生物（東京大学出版会）  
 昆虫と自然（ニューサイエンス社）  
 生物科学（岩波書店）  
 季刊人類学（社会思想社）  
 毎日ライフ（毎日新聞社）  
 人間工学（医歯薬出版）  
 bit（共立出版）  
 電波科学（日本放送出版協会）  
 新住宅（新住宅社）  
 放送文化（日本放送出版協会）

## 図書館のすすめ

上田 伝明

わが国の図書館法では、「図書館」を「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」（第2条）と定義している。大学に付設される図書館たる大学図書館の場合には、右の目的に加えて、とくに大学における研究教育活動を推進していくための基本的な施設としての性格を有していることは言うまでもない。

ところで、かかる大学図書館は、利用者（大学構成員——教官、職員、学生——が主となる）が、図書館職員を通して、図書館資料（図書一般、定期刊行物、新聞、参考図書、公文書、パンフレット等）を十二分に活用していくことにその機能を発揮する。それが積極的に利用されないことには、大学の心臓ともいわれる大学図書館の生命はないのも同然となってしまうのである。

かくて、学生諸君に望みたいことは、いまさら言うまでもないことではあるが、まず積極的に図書館へ足を運び（1日に一度は行ってみたい）、図書館資料を十分に活用し、そして分らないことがあれば遠慮することなく図書館職員に尋ねていただきたいということである。

「記録された知的文化財」たる図書館資料には、われわれの先人が、まさにペンに血をしたためるようにして書かれたものが多いはずである。かかる資料に対しては、敬意をもって接し、謙虚に学びとっていききたいものである。（教養部・法学）

### カードを繰る楽しみ

角 替 弘 志

図書館というとすぐに本を手にし、本を読むところと考えてしまう。しかし、図書館の楽しさの一つは、図書館に入ったところに並んでいるカード・ボックスに向い、一枚一枚カードを繰ることではないだろうか。とかく私達には実際に本が並んでいる前に立ち、直接その本を手にししてみないで、表を見たような気になれないというところがある。しかし、毎年おびただしい量の本が刊行されていることを考えると、そうした方法ではとても

すべての本に目をやり、必要な本を選ぶことはできないし、刊行されている本についての正確な情報を得ることもできない。

図書館の一枚のカードには、その本についての必要にして十分な事項が記入されている。一枚のカードを手にすることは一冊の本を手にしたことと同じ意味をもっている。そして、そのカードは一定の方式で分類され、必要に応じていつでも実物の本が取出せるように整理されている。

普通私たちは今必要としている著者も書名もわかっていない本が図書館にあるかどうかを確かめるためにカードを繰る。しかし、カードを繰っているうちに、思いもかけぬ本を見出して驚ろくことが少なくない。現在調べようとしていることにこんなに多くの本があるのかと驚いたり、逆にあまりに少ししか文献がなくて困惑したりする。思いがけない人が思いがけない本を書いているのを知ることもある。カード・ボックスのなかには、宝物が一杯にかくされているのではないかという気持が、カードを繰っていればいるほどに強くなるものである。

採し出す必要のある本がなくても、カードを繰るのは楽しいことにちがいない。図書館のカードには静大の前身であった学校を含めてこの大学の研究の年輪がうつしだされている。一冊一冊の本は、それぞれの時代にそれぞれの教官がある意図を持って選択し購入したものである。一枚のカードをみながら、この本を選んだのはどの先生で、何のために選んだのか、この本のどの部分を本当に必要としたのだろうか。この本を何人の人が、いつごろ読んだのだろうか、などと空想することも楽しいことである。カードを繰る楽しみを是非味わってもらいたい。（教育学部・教育学）

### 危機の時代と学問の出発

山 本 義 彦

新入生の諸君は、長い受験生活の真只中から抜け出した今、ひょっとして息抜きを、と考えているかもしれない。しかしまさに今、世界と日本の政治と経済——つまりわれわれの社会が途方もなく大きくかつ深い危機と何ものかへの過渡の橋にたたずんでいることを膚に感じていないだろうか。

諸君は「宇宙時代」の幕明け（1957年スプートニク打ち上げ）前後に生れ、小学校に入ると東京オリンピックと新幹線（64年）に関心を抱き、「経済大国ニッポン」の豊かな環境に育ってきた。

まさに日本は永遠の高度成長の魔法の杖を手にしたかの勢いであった。魔法の杖に見えたものは、今や効力を失い、ぼくらがほとんど疑問を呈することのないままにすごした学生生活（君たちと同じ新生生だったのは13年前のこと）と異なって、諸君はきっと“この社会でどうすればいいか”と反問しつつ知的探索の道を歩むだろう。

だが、この姿勢は、学問との触れ合いの中では大切ではなかろうか。なぜなら、自然科学にしる社会科学にしる、人類の自然＝社会への働きかけの過程であり、暗記し呑み込む対象ではないのだから、自己の生き方・環境への、つねに新鮮な深い検討を要求するものであろうから。ぼくは、諸君が、文字通りニューカマーとしての新鮮さと、何ものかへの過渡の橋を渡り切る勇氣を持って学ぶにふさわしい時期に直面しているのではないかと思う。

それでは、その手がかりを何にもとめればいだろうか。ぼくはその一つの課題として、自己の生活史をふり返ってみることを提案したい。ここにいう「自己」といっても、自己の周辺という狭い意味だけではなく、自分たちの生れ育ってきた社会の歩みともいうべきものであり、科学の展開過程をたどってみることでもある。それも個人的に行うより、身近な友人やクラスで、共同して調べてみる、検討してみる、という過程が、知的感覚を刺激し、主体的な学びとりの姿勢をつくり出すだろう。その座標軸の上に、自己の位置がみいだされもするだろう。（人文学部・法経学）

## 古 典 の 力

橋 爪 裕 司

考えてみると人に勧めるべき良書を挙げるのはむずかしいことです。ところが反面毎日のように新聞で「万人必読の書」が広告される時代ですから、これを全部図書館にそろえることは丸っきり不可能ですし、「万人必読」など嘘っぱちとしておいていいのでしょうか。ましてや「俺の求める本がないからこの図書館はけしからん」というのは、八つ当りに近いことになります。「必読」という意味すら註釈を要します。ある講義の内容を理解するために「読む必要がある」書物は「指定図書」という形で具体化します。ある研究がオリジナルなものであるためには、その分野においてあらわされた主要な文献はすべて「必読」の対照となります。しかし他人に良書をすすめることと、

このような意味の「必読」とは全く違うことのようにです。そもそも「万人必読の書」が嘘っぱちであるゆえんは、良書というものが元来個人的なものであって、それが極めて個性的な読者と独特な出会い方をする場においてのみ、その良書たる本質をあらわすものであることが、そこでは無視されてしまっているからだと思います。ところでこの出会いというものは、当人にとっては忘れがたいものでありますから、その出会いを反復してみたいと思うのも無理からぬことでしょう。そのような反復の篩によって選ばれ残ったもの、それを私自身にとっての良書と呼ぶことにしています。ここで論理は飛躍するかも知れませんがこのような篩を全人類の規模で適用すれば古典が生れることになりましょう。或は民族的規模で適用された結果が民話であり民謡であるとも言えます。要するに、或る書物が生れてこのかた、いつの時代にもその書物との出会いの経験を反復していた人々が存在しつづけたわけです。先日ふと挿絵の面白さにひかれて「マザー・グースの歌」（谷川俊太郎訳・草思社）を買い、こんな翻訳詩などわかりはすまいと思いつつも、親のペダントな出来心から3才と6才になる子供にプレゼントしたことがありました。ところが予想に反して毎日読まされる事になり、何度読んでも飽きないらしい。はては拍子を取りながら詩を口づさみつつ踊り出す始末でした。誰が作ったとも知れぬこの童謡、何の変哲もないように見えて、その中にひそむ力には端倪すべからざるものありと感じた次第です。それこそ古典の力とも言うべきものではないでしょうか。いやはや大学生に観めるべき良書を挙げなければならぬというのに、幼稚園児をひきあいに出してしまって恐縮でした。（理学部・化学）

## 思 い 出 の 書

山 田 蓁

私が大学を卒業したのは第2次大戦が終って3年目、当時外交も回復せず、物資も極度に窮迫して居り、新刊の洋書を入手することも全く困難であった。ただ閲覧出来るのはCIE図書館で、我々もよく通っては研究の助けとしたものである。

卒業直後電子回路の研究の手伝いをして居たとき、同図書館で、米国ベル研究所研究員のHendrik W. Bode 博士の「Network Analysis and Feedback Amplifier Design」という著書を見付けて読んで見たが、浅学の私にはよく

理解出来ない乍ら、その内容に心をひかれ、折を見ては出かけて読み耽った。(当時貸出しは禁止であった。)読み進むに従って、行故かこの書物が欲しくてたまらなくなり、米国に留学する人に頼んで送ってもらうこととした。金額は現在記憶に定かでないが、当時の大学卒初任給の2倍だったと記憶する。私の生涯での大きな買物の一つであろう。本書を手に入れたときの当時の気分としては、喜びというよりも何かこれから一仕事をしなければと云うようなものであったように思う。

さて折角手に入れて読み出したが仲々理解も容易でない。何度も同一の箇所を繰返すだけでさっぱり進まない。あれこれするうちメモを付けようとする。しかしメモも簡略なものでは間に合わない。結局一年かかって読上げた時には全巻翻訳が完了していたという結果となってしまったのである。

この著書は帰還増巾器の設計の基本となった名著で、その骨子は戦前すでに発表されていたが、日本の技術者には、その本質が理解されて居なかったという話も後から知らされたものである。現在この研究は自動制御系の設計の基礎として重要なもので、本学で自動制御理論の授業を担当しているが、この箇所に来るたびに記憶のよみがえる思い出の書となった。

先日MITより帰国された名古屋大学自動制御研究施設の伊藤正美教授から伺った所によると、Bode 博士はその後MITの教授となり、昨年停年を迎えられたという。本書は同博士30才前後の著書であり、この内容の研究は20代に行われたことになる。……………(工学部・電気工学)

(4ページよりつづく)

アサヒカメラ(朝日新聞社)  
美術手帳(美術出版社)  
文化財(第一法規出版)  
季刊芸術(季刊芸術出版)  
近代の美術(至文堂)  
みづゑ(美術出版社)  
三彩(三彩社)  
書壇(書壇院)  
映画芸術(大和書房)  
演劇界(演劇出版社)  
音楽の友(音楽の友社)  
レコード芸術(音楽の友社)  
テアトロ(テアトロ社)  
山と溪谷(山と溪谷社)  
英語教育(大修館書店)

英語と青年(研究社)  
現代ロシア語(現代ロシア語社)  
言語生活(筑摩書房)  
ふらんす(白水社)  
基礎ドイツ語(三修社)  
時事英語研究(研究社)  
月刊言語(大修館書店)  
季刊翻訳(みき書房)  
アルプ(創文社)  
文芸(河出書房)  
群像(講談社)  
俳句(角川書店)  
国文学解釈と鑑賞(至文堂)  
日本児童文学(盛光社)  
日本近代文学(三省堂)  
詩学(詩学社)  
新潮(新潮社)  
短歌(角川書店)  
海(中央公論社)  
ユリイカ(青土社)  
栄養と料理(女子栄養大学出版部)  
婦人公論(中央公論社)  
婦人通信(日本婦人団体連合会)  
暮しの手帳(暮しの手帳社)

## 静岡市内の図書館と博物館

館名	住所	電話
静岡県立中央図書館	谷田 620	62-1241
静岡市立図書館	追手町 4-30	52-9512
久能山東照宮博物館	根古屋 390	85-5612
登呂博物館	高松 410	85-0476
静岡市文化財資料館	宮ヶ崎 102	45-3500
日本平動物園	池田 1767-6	62-3251
駿府博物館	紺屋町	52-0111

## 多読・新入生・図書館

## 図書館と私

野村秀樹

松島博文

最近の私の読書は、1つの専門分野のテーマに即してそれと関連した文献や資料を漁るというものであり、そのために図書館を利用する。しかし、本来の読書の楽しみとは決して上記の様なものではない。読書の楽しみは多読にあり、広く色々の本を読み、かつ一定の計画に従わないで興味の趣くままに読むことである。特に教育部時代の様に、フレッシュ・多感でしかも知識欲が旺盛な時に読書の範囲を限定することは、自分の視野と教養を狭くしてしまうだろう。

書物は図書館で読むのがいい。何故なら、図書館には古今東西の名著が常備しており、読書の範囲を限定しないという点で優れており、しかも読むのに図書館の方が力が入る。新入生にとっては、受験時代に身につけた灰色のアカを払拭し、高校時代にはない新しい教養が必要とされる。また新入生は一見出無精の世代であり、「外国」というものをまだ知らないから、編見に促われない幅広い知識と遠な視野が要請される。そして教養部時代にこの様な修練を積まないため、大学時代を通して自由なる創造の開拓と学問追求の精神が殺がれてしまう可能性がある。

図書館で知識の宝の山を前にして、その山を散歩してみると、急に創造的な力が蘇ってくるのは楽しい。この様に図書館で良書との巡り会いを求めて、多くの書物を徘徊し、耽読し、或いは沈思黙考したり、それに飽きた時にはこの大学図書館から静岡市内を瞰して瞑想に耽る。こんな雰囲気が好きで図書館に通っている人もいるだろう。煩や苦悩し憂うつな時、先哲の教えから刺激を求めるために図書館に来てはどうだろうか。

生活の実践というものは、必ずそれと結びついた問題意識を読書の中で発見するものである。さあ、学内の喧操から一時逃れ、図書館の静閉とした雰囲気の中で、一人耽読し、瞑想に耽ってみようではあるまいか。

(人文学部 昭和48年度入学)

「図書館」、この言葉のもつ響きは各個人によって様々異なるであろう。ある人は親近感を感じ、反対に異和感を感じる人もあろう。時には、「今だ、全く利用していない」と豪語する“つわもの”に出会うこともある。

私にとって、それは常に身近かな所にあった。特に『静岡大学附属図書館』といった場合、いわれぬ重みを感じる。私はひょんなことから1年間外国へ行くことができた。その決心はというて静大の図書館の中で生まれたものであった。

そのようなでき事をはさんで、私は図書館を人並には利用したようだ。元来、図書館の雰囲気嫌いではないので、時間があれば、図書館にいたのを思い出す。ただ、目的とするところは、勉強のためというより、なんとかなしに時間を過したり、昼寝・休息という結果になる方が多かったようだ。閉館時間がきて、図書館の人に起こされたこともしばしばであった。まさに憩の場であり、英気を養う場であった。

でも、さすがに四年になったら本格的に利用するようになった。そして、何度か足を運ぶうちに図書館のサービスが本の貸出のみではなく、レファレンス、他の図書館からの貸借・複写サービス、などもやってくれることがわかった。又、他の図書館への紹介状まで書いてくれる。それで、大いに利用したつもりだが、十分ということにはほど遠い。たとえば、370代の分類記号図書のうち、利用したのはその数十分の一にも満たない。

図書館に入ると無表情に図書が並んでいるのが目に入る。さらに、その数倍は建物の地下で眠っている。私たちは、時々それらの本に手をのばすのさえ、時には、図書館に入るのさえ億劫になる時がある。しかし、図書館からの無言の呼び声を忘れてはならない。その呼び声に応じて、億劫さをふりきって図書館に入れば、必ずしや――。

(教育学部 昭和50年度卒業)